

この号にも、すばらしい原稿を多数いただいた。ご執筆いただいた先生方に深く御礼申し上げたい。

植村正三郎先生が扉に書かれている「天草島から」には、わが国の医療を支える旺盛な使命感がその隅々に溢れている。そこには、「美德の減退」が進む中で、必死に誇りを守ろうとするわが国の医師の姿がある。

最近、航空幕僚長をしていた空将の論文が世間を騒がせた。マスコミは歴史認識の問題として取り上げた。しかし、あの空将は、自衛官に確乎とした誇りを持たせたかったのではないかと思う。本来、国を守る自衛官は、自分の生命を投げ出す覚悟の必要な職業である。自衛官に与えられる対価から考えれば、とても割に合う生き方ではない。それを成り立たせているのは、国のために殉ずることを厭わない使命感である。

そんな使命感は単純に強要できるものではない。それは、国民がみんなで生み育てるものである。国民に国を守る気概があり、自衛官に敬意や感謝あるいは激励が与えられれば、対価などでは量れない生き甲斐が生まれ、自分の生き方に誇りが芽生えてくる。それこそが使命感である。

ところが、わが国の国民は、使命感を無条件に要求できるものと勘違いするようになってしまった。マスコミは、何ごとにつけ当事者の使命感の欠如を居丈高に糾弾する。国民は、そんな様子を毎日のように見せられ続けているうちに、使命感を無条件に要求して当然だと考えるようになったのだろう。そうすると、ふつうなら使命感など育たない。自分の好きでやっていることなのだから当然だと言われたら、自衛官は自分の生命を賭してまで国を守ってくれるだろうか。

勤務医が高リスク医療から一斉に離れだしているのは、そんな世相を背景にしているように思える。わが国の国民は、診療の結果が期待どおりではないからといって、刑事訴追することを微塵も不思議だと思わなくなってしまった。使命感を無条件に要求できると勘違いしているから、刑事訴追などしたら自分たちの利益にはならないことを理解できないのである。そんなことでは、使命感どころか無力感しか生まれないと考えておいたほうがいい。

国防や医療だけでなく、教育、行政、司法なども市場経済だけに委ねると社会が混乱する。その混乱を避けるための共通の仕組みが使命感や職業倫理である。しかし、ポストモダンの批判思想は、それらに寄り添う権力や権威を忌み嫌った。もしかすると、私たちはそんな批判思想の行き着く先を目撃しようとしているのではないか。これは逆らうことのできない社会の流れのような気がする。

しかし、私たちの若い仲間の誇りを守るために黙ってはならないだろう。あの空将のように、袋叩きにあうことを覚悟で、使命感の土壌となるものは何なのかを語らなければならないと思う。そうでなければ、今まで以上に無力感が蔓延し、高リスク医療は成り立たなくなるに違いない。